２０２０／０８／３０　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　副牧師

主　　題：幸いな人
聖書箇所：詩篇１篇

今朝は詩篇１篇から私たちに教えられている神様の真理を学んでいきたいと思います。

詩篇１篇

:1 幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。
:2 まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。
:3 その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。
:4 悪者は、それとは違い、まさしく、風が吹き飛ばすもみがらのようだ。
:5 それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。
:6 まことに、主は、正しい者の道を知っておられる。しかし、悪者の道は滅びうせる。

幸せとは何だろう――。これはすべての人が少なくとも一度は考えたことのある問いではないでしょうか？幸せになるにはどうしたらいいのか。心の満足を得るためにはどうしたらいいのだろう。どうしたらいつも喜んでいられるのだろう。周りを見渡せば幸せになりたい、幸せを手に入れたいと望んで生きている多くの人の姿を日々目の当たりにすると思います。特に最近、コロナウィルスの影響を受けて、社会が不安定に落ち込んでいる中にあって、私自身もさまざまなところで幸せとは何だろうと議論している記事や本、人々のつぶやきを見てきました。ある人はもっとお金を手に入れさえすれば、生活がもっと豊かになれば幸せになれるのに。ある人は将来が安定すれば幸せになれるのに。ある人は健康でさえいれば幸せになれるのに。ある人はコロナさえなくなれば幸せになれるのに。求めているものに違いはありますが、自分が求めているものを手にしたら、もしくは自分の望んでいる状況になりさえすれば幸せになれるのではないかと私たちは考えていたりします。そしてその何かを手に入れようとして熱心に努力をしたりしているのです。

１７世紀フランスの哲学者だったブレーズ・パスカルは、幸せについてこんな言葉を残しています。「全ての人間は幸福になることを求めている。そこには例外はない。取る手段は異なっていても、彼らは全てその目標を目指している。ある人々が戦争に行き他の人々が戦争に行かないのは、両者ともにもっている同じ[幸福への]欲 求によるのであるが、それにともなっている考え方が異なっているのである。意志はその[幸福という]対象のためでなければ、最小の動きもみせない。それは全ての人間の全ての行為の動機である。首をくくろうとする人々にいたるまでそうである。」と。すべての人間が幸福になることを望んでいるのは疑いもない事実だと言えると思います。そして別にそれ自体が間違っているとは思いません。皆、幸せを求めている、そんな私たちにとって大切な問いは、ではその幸せをどこに見出すのかということです。あなたは何に本当の満足を見出すのでしょう？今回見る詩篇１篇はその答えを明白に教えてくれています。聖書は私たちに本当の満足を持った幸いな人の特徴を明白に教えてくれています。皆さん、きょうのみことばをしっかりと心にとめてください。そして今からみことばを見ていく中にあって、次のことを自分自身に問いかけてください。

“私はこの詩篇が教える幸せを今見出しているでしょうか”
“私はこの詩篇が教える幸いな人でしょうか”

ぜひこのみことばがひとりひとりにとって励ましになるだけでなく、心をしっかり吟味する、そのようなものになることを心から願っています。

Ａ．幸せの定義

では１節をもう一度見てください。１節は「**幸いなことよ**」ということばで始まっています。このことばを別のことばで言いかえるとするならば「ああ、なんて幸せなんだろう」、「ああ、なんて幸せな人だろう」、「なんと祝福された人だ」と言うことができます。詩篇の著者はここで最高の喜びを持っている人物の姿を描いたのです。その人を指して、この人はとっても幸いな人だと、この人は本当の幸せを持っていると言ったのです。でも皆さん少し考えてみてください。この時詩篇の著者は一体どういう意味でこの人物が幸せだと言ったのでしょう？この人物はこの世と同じように何か自分の欲しているものを手に入れたから、何か自分の望んでいる状況になったから最高の喜びを持っていたのでしょうか？

１．幸いな人

そのことを考えるに当たって、私たちは詩篇の中を少し見てみたいと思います。そして恐らく、詩篇をよく読まれる皆さんは、この「**幸いなことよ**」という表現を聞いた時に、ああこのことばに

は聞き覚えがあるなと思われたのではないかと思います。そしてそのとおり、詩篇の中にはこのことばは２６回にも渡って繰り返し使われています。その使い方を見る時に、そのことばが一体どういう意味で用いられていたのかを知ることができます。

１）罪を赦された人　詩篇３２：１－２

例えば詩篇３２：１－２には「**幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、その霊に欺きのない人は。**」と書かれています。ここでは、主によって罪を赦された者、「**主が、咎をお認めにならない人**」が幸いなのだと言っています。

２）主に信頼する人　詩篇４０：４

また詩篇４０：４には「**幸いなことよ。主に信頼し、高ぶる者や、偽りに陥る者たちのほうに向かなかった、その人は。**」とあります。ここでは「**主に信頼し**」、主にのみ目を向ける者こそ幸いなのだと言っているのです。

３）主のことばを喜びとする人　詩篇１１２：１

また詩篇１１２：１「**ハレルヤ。幸いなことよ。主を恐れ、その仰せを大いに喜ぶ人は。**」と。ここでは、「**主を恐れ**」、主のことばを喜びとする者こそが幸いなのだと言われています。

４）主に希望を置く者　詩篇１４６：５

最後に詩篇１４６：５では「**幸いなことよ。ヤコブの神を助けとし、その神、主に望みを置く者は。**」と記されています。主に助けを求め、主に希望を置く者こそ幸いなのだと言われているのです。

その他の箇所についてはレジメに記しておいたので、時間のある時によく読んでみてください。 しかし、今見た少なくとも５つの箇所を読むだけでも、幸いな人が一体どのような人物だったのか、その姿が見えてくると思います。この人物が幸いだったのは、単に感情的な嬉しさや満足を持っていたからではありません。何か欲しいものを手にしたから、何か自分の願っている状況になったからこの人が幸せだったわけでもないのです。ではこの人物がどうして本当の喜びを持っていたのか――。それはこの人物が主に罪を赦され、主に信頼し、主を恐れ、主の言葉を喜びとし、主に希望を置くからこそ幸せだったのです。要するに、この人物の幸せや喜び、満足の源は主の内にあったということです。この人物が主と関係を持っているからこそ、最高の喜びを持っていると詩篇は教えているのです。

２．幸せの定義

このことから、著者が教える幸せというものを定義するとすれば、“幸せとは感情や状況に左右されるのではなく、決して変わることのない神と関係を持つ者に神が与える満足”だということです。自分が何を感じるか、自分が一体何を得るか、自分がどのような状況にあるか、そういったものによる幸せではありません。この幸せというのは、変わらない神にある幸せ、どんな時も心を満たす喜びだということです。だからこそ、パウロはピリピ４：１１で「**乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。**」と言うことができました。私たちもよく知っているとおり、パウロほど苦しみや困難、試練に遭った人物はいません。ましてやこのピリピを書いた時ですら、明日には死ぬかもしれないという死と隣り合わせの状況に置かれていたのです。しかし、そのような中にあってもなお彼は「**どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。**」と言えたのです。どんな状況にあっても私の心はすばらしい喜びに満たされていますと言うことができたのです。皆さん、これこそが神を知り、神にある満足を持っていた者だけができる生き方です。この世の状況に左右されず、自分の感情に左右されない、そんな神にある喜びこそが本当の幸せなのです。詩篇の著者の描いた幸いな人はこのような幸せを持っていました。神にあって、この世が絶対に与えることのできないすばらしい最高の喜びを持っていたのです。

Ｂ．幸いな人の４つの特徴

でも、それだけではありませんでした。詩篇の著者は続けて、この幸いな人が持っていた４つの特徴を私たちに教えてくれています。すばらしい喜びを持っていた人が持つ４つの特徴です。

１．この世の影響から離れる　１節

続いて１節に「**悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。**」と書いてあります。幸いな人の最初の特徴は、罪にあふれたこの世の影響から離れる人物だということです。 ここには幸いな人がこんな行動はとらないという具体的な３つの行動が挙げられています。それぞれ興味深いものなので、一つ一つを見てみましょう。

１）「悪者のはかりごとに歩まず」

まず、「**悪者のはかりごとに歩まず**」とあります。悪者とは神を知らない、神様に従わず憎まれること、罪を犯す者のことを言い表しています。「**はかりごと**」というのは別の言葉で言えば、アドバイスや助言という意味を持っています。そして、「**歩まず**」というのはそのような生活、生き方をしないということです。

まとめると、幸いな人は神を知らないような悪者のアドバイスを頼りにした生活をしないということです。
２）「罪人の道に立たず」
　次に、「**罪人の道に立たず**」とあります。罪とは的を外すことです。ですから、罪人というのは正しい的、正しい道から外れて歩んでいる人物のことを表しています。「**道**」というのはその人物の生き方です。 そして「**立**」つということばは自分をある立場に落ち着かせるという意味を持っています。つまり、幸いな人というのは、正しい道から外れて歩んでいる者の生き方に自分自身を落ち着かせ、それに倣って生きていくことをしないということです。
３）「**あざける者の座に着かなかった**」
　３つ目に「**あざける者の座に着かなかった**」とあります。この「**あざける者**」とは、悪者や罪人とは異なり、高慢で自分自身が神に逆らうだけでなく、周りの正しく歩もうとしている者をばかにしたり、非難するような者です。わかりやすく箴言２１：２４がこのように記しています。「**高ぶった横柄な者ーーその名は『あざける者』、彼はいばって、横柄なふるまいをする。**」と。ですから幸いな人は、そのような者の座に着かない、自分の罪にあふれた生き方を誇って、「**あざける者**」と一緒になって同じように神に従う者をあざけることをしないと。幸いな人というのは自分自身のそのような罪深い生き方を誇るだけではなく、正しく歩んでいる者をののしったり、そんなことはしませんと言っているのです。
　３つのことをまとめると、幸いな人とは神を知らないこの世のアドバイスを頼りにせず、正しい道から外れた罪人のように罪を犯さず、そして、高ぶって正しい者を見下す、あざけるようなことはしないということです。もちろんこれは、幸いな人がいつも完璧にこれらをこなせるとか、いつも完璧に罪から離れ、全く罪を犯さないという話をしているのではありません。Ｉヨハネ１：８に「**もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。**」とあります。この世の中にあって罪を犯さない人はいません。しかし、幸いな人というのは聖い神様を知り、この方と交わりを持つことで最高の喜びを持っているがゆえに、神を愛し、喜ばせていきたい、その生活をするために、その妨げになる罪から離れて生きていくというのです。
◎　この世の影響
　ここで少し考えてみてください。この幸いな人の姿はあなた自身の生き方を反映したものでしょうか？振り返って見て、あなたは今この世の影響から離れようとした歩みをしているでしょうか？ 私たちの生きている世界は多くの間違いや罪であふれ返っています。そしてこの世にあるものすべてがその罪の影響を受けていることを皆さんもよくご存じだと思います。少し自分自身に正直になれば、自分自身の生活を振り返れば、私たちはそんなこの世の考えやアドバイスに耳を傾けたりしていないでしょうか？例えば、私たちは私たちの周りの出来事、社会や世界についてのいろいろなニュースをテレビやネット、新聞を通して知ります。コロナのことやアメリカで起きていること、世界各国で起きていることをいろいろな人の考えを私たちは聞くのです。そして時に同じテーマについて話しているはずなのに、いろいろな人がいろいろなことを語るがゆえにどれが正しいのか混乱を覚えたり、そのことによって不安を覚えたりすることもあると思います。
　また、周りの社会だけでなく、私たちの生き方についてもいろいろなものから影響を受けたりしています。例えば本や雑誌かもしれません。ドラマかもしれませんし、映画かもしれません。自分の大好きな芸能人や有名人かもしれません。そういったものを通して、私たちはこのように生きられさえすれば幸せになれるのではないかという理想を頭に植え付けられているのです。もっとお金があれば、こんな容姿があれば、こんな友人と付き合えば、こんな恋愛をして、こんな相手と結婚生活が送れれば、良い学校に行けば、良い成績を取れれば、よい職場につければと。私たちはいろいろな人からアドバイスとしていろいろなことを聞いているのです。そしてそれがその人の生き方に影響を与える。私たちもそのことをよく経験したりするでしょう。
　またそれ以外にも、私たちは自分の行いに関しても影響を受けたりします。例えば誰かから不当に扱われ、あなたが怒っている時に、あなたの友人はこう言うかもしれません。「それは相手が間違っているからその怒りは当然だ。あなたは相手が謝罪するのをただ待っていたらいいよ。」と。また将来に対して不安を抱くような状況にある中で、もしかしたらあなたの同僚はこうアドバイスするかもしれません。「不安があるのかい？その不安や悲しみを解消するためには、もしかしたらあなたには趣味が必要かもしれない」と。私たちの周りにはいろいろなアドバイスや考えがあふれています。そして、私たち自身もいろいろなところでその影響を受けているのです。もし自分自身がどれほどそれによって影響を受けているかわからないと考える方がおられるのであれば、自分自身にこう問いかけてみてください。あなたの周りにいる人があなたの行動や考えを見る時に、その人があなたのうちに見るのはこの世のものと同じものでしょうか？それともそれとは全く異なるものでしょうか？自分が何かを行動する時、自分が何かを考える時、その行為の動機となっているもの、その行為の根源となっているものは、この世の考えに沿ったものでしょうか？それとも神のみことばに沿った、神の教えに沿ったものでしょうか？

もちろんこの世のアドバイスすべてが悪いというわけではありません。そして全くそんなものは必要ないということでもありません。しかし、もし私たちが神に目を向けるよりも、この世のアドバイスに耳を傾け、この世の考えに耳を傾け、そしてその考えで心を満たし、そういっ たものによって自分の行動を決定していくのであれば、あなたの行為が引き起こすことは神に喜ばれない、罪になることが多いということです。私も含め、ここにおられる皆さんは必ずそのような経験を一度はしたはずです。そして今もそのような闘いの中にあるのです。私たちは皆、自分の道、自分の考えが正しいと思います。箴言のことばを聞いてみてください。箴言１４：１２は「**人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。**」と言っています。神を知らない、神を喜ばせようとも思っていない、曲がった 世の中の考えに従うことによって、本当の喜びや満足を手にすることができるでしょうか？幸いな人というのは、このような曲がった世の中の影響から離れる人で す。これはこの世のアドバイスや人をシャットアウトする、遮断するという話をしているのではありません。そんなことをしてしまったら、私たちはどこにも住むことができません。そうではなくて、さまざまな考えにあふれているこの世の中にあって、そういったものを頼りにするのではなく、いつも私たちの考えを遥かに勝る神に信頼し、身を委ねて生きていく。それこそが幸いな人の生き方の特徴だとパウロは教えます。あなたはそのような幸いな人でしょうか？

２．神のことばを喜びとする　２節

次に、幸いな人の２つ目の特徴が２節に記されています。２節「**まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。**」と書かれています。幸いな人の２つ目の特徴は、神のことばを喜びとするということです。

１）「主のおしえを喜びとし」　詩篇１１９：１０３

ここで「**喜びとし**」ということばが使われていますが、これはこの人物の心が主の教えに対して燃え上がっているような、心の底から喜びを見い出している、そういった意味を持っています。この人物はみことばに対して心から喜びを持っている。この人物はみことばがどれほどすばらしいものなのかを心から知っているのです。まさに詩篇１１９：１０３が「**あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。**」と言うように。幸いな人というのはこの世の間違った、罪に汚染された影響から離れ、この世の考えで心を満たすのではなく、自分の「**上あごに、なんと甘い**」、そんなすばらしいみことばでもって自分の心を満たして生きていく人物だということです。この人物は自分自身が歩んでいくのに際して、主のみことばこそが最も大切なものだと、それこそが最もすばらしいものだということをよく知っていました。

２）「昼も夜もそのおしえを口ずさむ」　Ｉペテロ２：２

幸いな人がどれほどまでにみことばに喜びを見出して、どれほどまでにみことばに対して熱心であったのか、そのことがこう続いています。「**昼も夜もそのおしえを口ずさむ。**」と。言い換えれば、昼も夜もどんな時も、幸いな人は主のみことばを口ずさみ、その真理に心を思いめぐらせているのだということです。想像してみてください。 朝起きた時に、新しい一日を与えられたことを感謝して、みことばを覚えて朝を迎え、昼仕事をしている時は、それが守られるように主のみことばに頼って働きをし、夜床につく時はその日一日を守ってくださった神に心からの感謝を捧げる。そんな人物がいたとすれば、確実に言えるのは、みことばでその人の心が満たされているがゆえに、間違ったこの世の考え方がその人の 心を満たすことはないということです。あなた自身の心をすべてみことばで満たしているのであれば、そこにこの世の考えが入り込む隙間はない。幸いな人というのはそのような人物なのだということです。幸いな人はこのようにして最高の喜びを神のみことばの中に見出して生きている者です。

では皆さん、この幸いな人の姿はあなた自身の生き方を反映したものでしょうか？私たちはみことばにいつも心を満たした歩みをしているでしょうか？もっと言えば、あなたはみことばを学ぶことに対して、今心からの喜びや心からの熱意を持っているでしょうか？ペテロはＩペテロ２：２でこう言いました。「**生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。**」と。もし私たちが救われ、生まれ変わったのであれば、自分の信仰の成長に絶対必要不可欠な「**みことばの乳**」を求める者に変えられたのだと。ではどうでしょう？私たちは何か勘違いをして満腹感を覚えて、神のことをすべて知ったかのように、そのような歩みをしていないでしょうか？また、あなたの生き方はみことばによって変えられ続けているでしょうか？心を満たして、みことばによってひとりひとりが変えられ続けているでしょうか？それとももう自分は成長し切ってしまったかのように、自分のうちにはもう変えるところがないかのように振る舞っていないでしょうか？自分自身に問いかけてみてください。あなたは最後にいつみことばによって変えられたでしょう？あなたを最後に変えたそのみことばは一体どのようなものだったでしょう？多くの人はこの詩篇１のこの部分を取って、みことばを読まなければいけません、みことばを読む時間をぜひ作りましょうとアドバイスをされると思います。もちろん、それはとても大切なことです。私たちはみことばを読み、そしてそれを学ぶことなしには、神のことばを知る ことがないからです。 しかし、重要なのは、この詩篇の著者は「**昼も夜も**」その教えを“読む”とは言いませんでした。「**昼も夜もそのおしえを口ずさむ**」と言ったのです。重要なのは

ただ読むのではなく、ただ知識を蓄えるのではなく、読んだことを理解して、その真理で心をめぐらし、そして実際にそのみことばに従って歩むことなのです。そして心をみことばで満たして、みことばに従って歩もうとするのであれば、必ずその人の生き方は変えられるのです。

３）神のことばの十分性　Ⅱテモテ３：１６

Ⅱテモテ３：１６に「**聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。**」と記されています。聖書は私たちのことを変えることができない力のないものではありません。この聖書はこの世界を造り、私たちを造った創造主である神が、主権者であり、全能の神が記されたものです。だとすれば、このみことばは、あなたの心を変えるのに不十分なものなのでしょうか？ このみことばはあなたが不安や悲しみでいっぱいになった時に、あなたの心に喜びを与えるのに不十分なものなのでしょうか？このみことばは苦しみの中あって、希望がない時にあなたに希望を与えるのに不十分なものなのでしょうか？この地上にあって生きていくのに、このみことばは不十分なものなのでしょうか？皆さん、どう答えられますか？もし不十分でない、神様は私たちにとって必要なもの、十分なものを与えてくださったと答えるのであれば、みことばをもっと学びたい、みことばをもっと心に蓄えたい、そのことを心からの喜びにしたいとならないでしょうか？

どうか皆さん覚えてください。私たちの希望、喜び、慰め、平安、それらはすべてこの中に記されています。私たちの信じる神が一体どのようなお方なのかも、この中に記されています。私たちを救い出してくださったそのすばらしい救いがどのようなものなのか、そのこともこの中に記されています。私たちがクリスチャンとして神に喜ばれる者にどう変わっていくのか、そのこともこの中に記されています。この悪にあふれたさまざまな誘惑やさまざまな敵がいるこの世界で生きていくために、必要な武器もこの中に記されています。私たちの歩みに必要なものはすべてこの中に記されているのです。不十分なものではありません。神のことばであるがゆえに、私たちに必要なものはここに記されているのです。

さて、あなたにとって必要なものはこの世のアドバイスでしょうか？それとも、この神の十分なことばでしょうか？幸いな人は、「**主のおしえを喜びとし、**」このみことばを「**昼も夜も……口ずさむ**」、そのような人物です。

３．神の前に価値のある実を結ぶ　３節

続けて、幸いな人の特徴が３節に記されています。「**その人は、水路のそばに植わった木のようだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。**」と。幸いな人の３つ目の特徴は神の前に価値のある実を結ぶということです。

１）「その人は、水路のそばに植わった木のようだ」

３節はまず「**その人は、水路のそばに植わった木のようだ**」と言っています。この木は適当な場所に勝手に生えている木ではありません。意図的に木にとって最も必要な、最も大切な栄養である水をいつでも得ることができるように、水路のそばに植えられているのです。ですから幸いな人というのは、まるで木が必要な栄養分である水をいつも取り込むように、神のことばから自分が成長するための栄養分を摂り続けるのです。

２）「時がくると実がなり、その葉は枯れない」　ヨハネ１５：１－２、ヘブル１２：１０－１１

そして栄養を受け続けるのであれば、その結果が「**時がくると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。**」と記されています。神のみことばを愛し、それによって成長し続ける者には神様からのあふれんばかりの祝福が用意されている、そのことを詩篇の著者は約束してくれたのです。もちろんこれは私たちがみことばに専心さえすれば、困難や試練に一切遭わないということを言っているのではありません。どれだけみことばを学んでも、どれだけ成長しようとも、私たちは私たちのうちにある罪との戦いを経験します。また、いろいろな機会に私たちはひどい苦しみを味わうこともあるでしょう。さらに言えば、私たちは時に周りを見渡せば、神を知らずに好き勝手に生きている人が何の困難も覚えずに満足を幸せに生きているような姿を目の当たりにするかもしれません。クリスチャンであるゆえに不思議に思われたり、 クリスチャンであるゆえに罵倒されたり、そのようなことも経験するかもしれません。そういったことを経験する時に、「じゃあ、どこにクリスチャンとしての満足があるのだろう、どこに喜びがあるのだろう、どこに本当の満足、幸せがあるのだろう」と考えたことのある方もいるかもしれません。もしそんなふうに考えられることがあれば、幸いな人とは「**時が来ると実がなり、その葉は枯れ**」ることがないという、このみことばを思い出してください。詩篇の著者はいつも実がなっているとは言いませんでした。「**時が来ると実が**」なると言ったのです。要するに霊的な実が表立って実を結ばない、そのような期間が存在するということです。イエス様も次のように言われています。ヨハネ１５：１－２「**わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。**」と。また、私たちの最善をご存じの神は、私たちのどこに弱さがあり、私たちのどこを成長しなければいけないのか、そのことをよく知っておられる神は、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、さまざまな試練を与えることもあるのです。

ヘブル１２：１０－１１に「**なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。**」とあります。 だからこそ、私たちがみことばを熱心に学び、みことばに熱心に従い、ますます主を愛そうと歩んで行く時に、確かに一時的には私たちの置かれている状況が非常に苦しく、悲しみや絶望を覚えることもあるのです。しかし、それさえも私たちがさらに実を結ぶために必要な訓練の機会として神が与えた成長の機会だということです。だからこそ、私たちは忍耐をもって耐え忍び、変わらず悪から離 れ、みことばによって変えられ続けていくことを追い求めなければいけません。そしてそうすれば、時が来ると主の前に価値のある実を必ず結ぶのです。 確かにクリスチャン生活の歩みあって、良い時も苦しい時もあります。皆さん、鍵は私たちの栄養分である神のことば、聖書です。栄養が行き届いているからこそ、実がならない時でさえその葉は決して枯れることがないのです。

３）「その人は、何をしても栄 える」

そして「**その人は、何をしても栄える**」と書かれていました。もちろん著者はここで幸いな人はどんなことをしても成功するという話をしているわけではないことは文脈から明白です。 幸いな人は、みことばに根付き、どんな時も神様のみこころに従って、それを求めるがゆえに御心にかなった祈りを捧げるようになるのです。 そしてそのようなみこころにかなった祈り、みこころにかなった歩みというものは「**栄える**」、祝福されるということです。幸いな人がなすすべての行為は、神の前に永遠に価値のある、その実を結ぶ、そしてすべてにおいてこの人は栄えるのだと。 そんなすばらしい幸せ、そんなすばらしい祝福をこの人物は味わうことができると詩篇は教えます。

◎ 悪者の姿　４－５節、６ｂ節

そしてこれが４－５節に書かれている悪者とはすべての面において異なるのです。４－５節をもう一度見てください。「**悪者は、それとは違い、まさしく、風が吹き飛ばすもみがらのようだ。それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。**」、悪者がどのような者かは１節で見ました。この人物は、神が望まれることよりも、自分が望むことをします。この人物の関心は神や神のことばを愛することよりも、この世と同じように自分自身のことを考え、自分にとって得になるようなものを求めるのです。だからこそ、この人物が実を結ぶことも栄えることも決してありません。そしてそんな人物を待っているのは、神からのさばきなのだと明白に教えています。 ここで、著者は悪者を「**もみがらのよう**」に風に吹き飛ばされてしまうと言いました。この「**もみがら**」というのは、この当時も農家の 収穫の時期によく用いられた言葉です。農家の人にとって、「**もみがら**」というのは食べることも、市場で売ることもできない一切価値のないものでした。価値がないゆえに「**もみがら**」はすぐに捨ててしまうようなものだったのです。同じように、神の前を正しく歩まない、そのような者は神の前に一切役に立たない無価値 なものだから「**もみがら**」ように捨てられてしまうのだと。この悪者について続けてこうも記されています。「**それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。**」、また６節の最後も「**悪者の道は滅びうせる。**」ということばで締めくくられています。

この悪者の姿を記した４－６節の中でみことばが繰り返し教えたことは、自分のために生き、神に逆らい続けるそんな罪人は必ず神のさばきを受けるのだということです。悪者の道は必ず滅び失せると。もしかしたら、今は神様なんてと考えて自分のやりたいことをして生きているかもしれません。誰も死後のことはわからないから、生きている今とにかく楽しんで、死んでからのことは死んでから考えればいいとあなたは考えているかもしれません。しかし、聖書はそんなふうに教えてはいないのです。主の前に立つ時、あなたが後悔しても、そこに二度目のチャンスはありません。必ず「**悪者の道は滅びうせる**」、悪者に対しては神の正しいさばきがあるのだと詩篇は繰り返し教えました。

そして皆さん、気づかれたことかと思いますが、詩篇１篇には二種類の人物しか登場していません。本当の満足を持っている幸いな人か、神に逆らう滅び失せる人かそのどちらかしか登場していないのです。要するにここにおられる皆さんも、そしてこの世界を歩むすべての人も必ずどちらかに属しているということです。あなたはどちらの人でしょう？今まで見てきたような特徴を持った、神と関係を持った幸いな人でしょうか？それとも今まさに滅びへと向かっている人でしょうか？もし自分が神に逆らい滅びへと向かっていると気づかれたのであれば、幸いな人の特徴を持っていないことに気づかれたのであれば、あなたにすばらしいニュースがあります。それは神の前に役に立たない、神の怒りを受けるだけの、価値のない私たち罪深い者のためにイエス・キリストは十字架に架かって罪の赦しを備えてくださったということです。

ローマ５：８では「**しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。**」と書いてあります。無価値な私たちが、何もできない私たちが、神の前に何か価値あることをしたから、神様が私たちを救ってくれたわけではありません。要するに「**まだ罪人であったとき**」、価値がなかった時に、そんな私たちさえも愛して

くださった、その愛によって、イエス・キリストの十字架とその復活のわざによって、罪が赦されたのだと。恵みと愛によって私たちは罪から救われたのだとそう聖書は教えるのです。ですからどうかもしこの中に幸いな人の特徴を持っていない、神のことを知らない、イエス・キリストを救い主として受け入れていない人がおられるのであれば、きょうこの方を信じ、どうかそのように歩んでください。悪者は必ず滅び去ります。しかし、幸いな人はみことばに根差しているがゆえに神の前に価値のある実を結ぶのだと、その生き方こそ本当の喜びがあるのだと教えます。

４．神に守られている　６節　マタイ２８：２０

そして最後に、４つ目の特徴が６節に記されています。６節「**まことに、主は、正しい者の道を知っておられる。**」、幸いな人の４つ目の特徴は神に守られているということです。「**主は、正しい者の道を知っておられる**」と言いましたが、これは単に神が正しい者の道を知識として知っているという以上の意味が含まれています。主はご自分のものを愛し、その者の歩みをいつも守っていてくださるということです。

これまで見て来たように、幸いな人は悪や困難を経験しない人ではありませんでした。苦しみも経験しますし、悲しみも経験します。悪から離れて神様と神のことばにいつも喜びを見出して、忠実に歩もうとする時には必ずそこには困難が伴うのです。もしかすれば大切な人から拒絶されることもあるかもしれません。悲しみによって涙が止まらない、そんな夜を過ごすことがあるかもしれません。罪との闘いに敗北を喫し、打ちのめされることもあるかもしれません。自分の頭では理解できないようなことが周りで起きていて、不安になったりすることもあるかもしれません。私たちの周りで確かにいろいろなことが起きます。主の道を歩んでいるその中にあって、いろいろなことがあります。しかし、どんなことがあったとしても、あなたの行くところどこにあっても、主がともにいてあなたを守ってくださる。イエス様もこう言われたことを皆さん覚えておられると思います。マタイ２８：２０「**見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。**」と。これがどれだけ心強いことか、私たちがどんなことを経験していても、そこに神がいつもともにいてくださる、どれだけ幸せなことでしょう。幸いな人はどんな時も神様によって守られている人物だということです。

さて、今朝は幸せとは何だろうか、そして幸せをどこに見出すのか、そのような問いからみことばをともに見てきました。あなたはどうでしょう？あなたはこの詩篇が教える幸いな人だったでしょうか？そんな特徴を持って今を歩んでいるでしょうか？今皆さんは主にあって最高の喜びを持って生きているでしょうか？この罪にあふれた世の中の影響から離れて、主の教えをいつも喜びとして神の前に価値のある実を結ぶ、そのような者でしょうか？もしどちらかわからない、幸せをどこに見出したらいいのかわからない、そのような人がこの中にいるのであれば、どうかきょうまだ時間が残されている時に自分の生き方をしっかりと考えてください。イギリスの神学者ジョン・オーウェンはこんなことばを残しています。「サタンの最大の功績は、自分自身の永遠の幸せを考えるのに、死まで十分な時間が残されていると人々に思わせたことである。」と。この世界の人は皆今の幸せを求めて生きています。聖書が教えるのは今の幸せも、そして永遠の幸せも心からあなたのことを満たすそんな満足もすべて神にのみあるということです。神だけがそのような満足を与えることができるのです。誰一人として明日があると言える人はいません。どうか自分の永遠に関わるこの真理を考えられる間にぜひ考えてください。そして、この世の幸いな人として今歩んでいる皆さん、すばらしい喜びを皆さんは持っているのです。どうかそのことを感謝して、ますますキリストに似た者に変わり続けていく者としてともに歩んでいきましょう。